

宮古訪問プログラム　宮古北高校にて「震災遺構」を考える

ともしび
共生委員会ニュース

2016 年度　3 号

2016 年 10 月 4 日版

共生委員会ニュース「ともしび」　　スクールモットー「地の塩、世の光」

共生・校外学習委員会は平和や共生に関わる活動、修学旅行などを担当する教員の委員会です。原爆投下の地、長崎を訪れる 2 年生の修学旅行だけでなく、高等部の 3 年間の生活を通じ、同じ社会に共に暮らす様々な人々との関わりに目を向け、平和や共生の問題を考えていきましょう。この共生委員会ニュースでは、様々な経験をする機会を得た生徒や教員の声も他の多くの皆さんへ届けたいと思っています。その経験を共有し、一緒に考えるきっかけとして下さい。

青山学院フィリピン訪問プログラム参加者募集のお知らせ

フィリピン訪問プログラムとは、青山学院初等部、中等部、高等部、大学がキリスト教一貫教育プログラムとして共同で行っている、世界の貧困問題と支援に関するスタディツアーのプログラムです。貧困に関する事前学習を経て、高等部がクリスマス献金などを通じて生活を支援している三名のフィリピンのチャイルドの住む地域を実際に訪問します。フィリピンのチャイルドたちとのあたたかい交流を通じて、知識だけでなく心の繋がりを育むこと目的としています。

申込の際には所定の申込用紙を受け取りに来てください。

行程　　2017 年 3 月 20 日（月）～3 月 25 日（土）　(5 泊 6 日)

費用　　180,000 円（含保険料）

※高等部からの補助と SGH プログラムであることから、
派遣奨励金（半額程度）が出ます。

申込締切　2016 年 10 月 28 日(金)

選考方法　作文、および面接（11 月上旬）

担当　　相良、藤本





過去のフィリピンプログラム参加者のレポートは高等部ＨＰから見ることができます。

http://www.agh.aoyama.ed.jp/education/peace/philippines/

第１回グローバルウィークを振り返って

「共生」～サーバント・マインド　６月20日（月）～25日（土）

足元に目を向けるところから、高等部の SGH は始まる

去る 6 月 20～25 日の一週間、高等部ではグローバルウィークが行われました。詳しくは高等部のホームページにも載せられていますが、大きなイベントとしては 24 日にシリア難民のジャマールさんとの座談会、25 日には被災地のボランティアコーディネーターをされているＹＭＣＡ佐久間さんとのワークショップが行われました。また、礼拝の時間にも高等部の先生方以外に三森先生、野田先生などのゲストをお呼びして、主にホームレスの方々についての実情等のお話を聞きました。


図書館映画上映会


ボランティア部

さらにお昼休みにはダンボールハウス体験、図書館映画会、難民の話をするスペシャルチャットルームなど盛りだくさんの企画で、感想文などを見ても多くの生徒が忙しい中を縫って放課後のイベントなどにも積極的に参加してくれたようです。参加した生徒の皆さんは、ホームレスや難民の方の日本における現状を学んで、とても感銘を受け勉強になった、もっと理解を進めなければいけないといった感想を多く寄せてくれました。ただ、佐久間さんの座談会もそうなのですが、放課後や土曜日に行われたイベントはクラブなどと重なり出られずに残念だったという人も多かったようです。


佐久間さんの被災地支援ワークショップ


シリア難民ジャマールさんの座談会


スペシャルチャットルーム

「多磨全生園」に行き、ハンセン病で差別を受けた方のお話しを伺い、事実の一端を学んできませんか？

ハンセン病について、皆さんはどれくらい知っていますか？

ハンセン病は感染力のとても弱い伝染病で治療法もあります。それにも関わらず、重症になると皮膚がただれる外見になることから、人々から怖がられ偏見が持たれていました。日本では法律で 1996 年まで強制隔離政策とひどい人権無視の政策が行われていました。法律が改正された現在でも差別は続いています。

それらの大変な苦しみを受けている方々のお話しを伺い、国立の隔離施設の一つであった「多磨全生園」に行く機会をボランティア部で設けました。「語り部」の方の高齢化が進み、そのお話しを伺う機会は大変貴重です。そのためボランティア部以外の方にも参加いただきたく思います。参加希望者は、ボランティア部顧問の片山、室田まで 10 月 31 日までに申し出て下さい。

日時：11 月 26 日（土）10：00 清瀬駅改札口集合（制服）　15：00 清瀬駅にて解散

多磨全生園にて、資料館の見学、園内見学、元ハンセン病の方の講演等

宮古訪問プログラムに参加して

2016 年 8 月 4～7 日　14 名の生徒が岩手県宮古を訪問し、震災遺構の見学、宮古北高校との交流、釜石の仮設住宅の清掃などを行ってきました。

HR309　H. S.

「津波てんでんこ」これは岩手県宮古の人たちにとって意味深長な言葉で重い響きを持っている。てんでんことは各自という意味であり、つまり明治と昭和時代の 2 度大きな津波を経験した宮古では津波が来たら各自で自分の身を守ろうという先人からの教訓なのである。

2011 年 3 月 11 日東日本大震災が起きた。３．１１＝津波を連想する程、原発の被害に加え津波の被害が甚大であった。私は被災した人々にどんな手を差しのべたら良いか分からず 5 年の歳月が過ぎ去った。高等部に入学し、先輩方が津波の被害が最も酷い田老地区を訪問された体験談に心を打たれ 5 年経った今こそ出来る何かがあるのではないかという思いでまず自らの目で直接現状を見たい、微力ながら私に出来る事を見つけたいと思い宮古訪問プログラムへの参加を決意した。



最初に美しい浄土ヶ浜の青い海を見ました。

宮古に到着してすぐ岩崖から眼下を臨むと穏やかな紺碧の海に目を奪われた。その後田老観光ホテルの社長さんが撮影した震災当日のビデオを観た。最初は地震がおさまった後の静かな海を背景に田老地区が映し出された。正に今見たばかりの風景である。ところが突然怪物の様な大きな波が街に襲いかかって来た。巨大な津波の襲来である。一瞬にして防波堤を越え田老地区を容赦なく飲み込んだ。私は衝撃のあまり目を背けた。「津波来たよ」という社長さんの叫び声の後、一瞬にして逃げる人、車、建物が消え去り辺りは海と化した。この場所で５年前にこんな悲劇が起きたかと思うと背筋が寒くなった。ビデオはつらい現実を訴え私たちは様々な事を学び考えさせられた。まず震災直後毎日のようにテレビで目にした惨状であるが年月が経つとともに記憶から薄れている事を反省した。防災意識も同様である。決して震災を風化させてはいけないと思った。東京にも同規模の震災はいつ起こるか分からない。もし南海トラフ地震が起きると千葉県館山で 11m、東京湾で３ｍの津波が想定されると言われている。津波の第一波は地震発生から約 30 分後である。その時私たちはどう行動すればよいのか、今回貴重な体験をした私たちが周りの人に伝えなければならない使命があると痛感した。とにかく波を見に行ったりしないで高台に避難する事など一人ひとりの防災意識を高める事が重要である。


たろう観光ホテルで説明を受けた後、津波映像を見ました。

まだ復興までの道のりは遠く援助が必要である。仮設住宅で不自由な生活を強いられている人が沢山いる。東京の高層ビルや高速道路は東北の人々の労働力のお陰だと部長先生が仰っていた。その人たちのために何が出来るのか。それは興味を持ち、被災地を「知る」努力をするなど小さなことの積み重ねで大きなものとなるに思う。震災を忘れずに被災地に訪れてくれて有り難いと言ってくれた「学ぶ防災」の小幡さん、会いに来てくれて復興に向き合ってくれることが嬉しいと言ってくれた宮古北高校の生徒たちや宮古を好きになってほしいと訴えた「みやっこベース」のメンバーの方の生の声を周りの友人や家族に伝え、共に考えていきたい。


釜石の仮設住宅で清掃作業後の集合写真

「津波てんでんこ」の教訓と共に。

2 年生夏休みの課題から

66 期生は 11 月の修学旅行に向けて、夏休みの課題として、身近な方（または地域）の戦争体験に関する取材を行い、その内容をまとめました。その中から部分的に何人かの文章を紹介します。

生徒の取材を受けてくださった方々は戦争時にはそれぞれ様々な異なる境遇に置かれていました。

HR202 **O.S.さん**（終戦時、満州にいて 10 ヶ月後にやっと日本に帰った祖母に取材）祖母に話を聞いている中で何度も「戦争はぜったいにしちゃいけない。」と祖母が言っていたのが私はとても印象に残っています。終戦後の中国では日本人の子どもを中国人の養子として出された残留孤児がたくさんいました。その中で曾祖母は祖母たち 4 人兄弟の誰ひとり欠けることなく日本につれて帰ってきたことは本当にすごいと思うしもしも祖母が残留孤児として中国で戦後も育っていたらきっと母は生まれなかったし、必然的に私が生まれることもなかったのです。

HR204 **M.H.さん**（日本の植民地だった朝鮮の小鹿嶋で生まれた祖母に取材）朝鮮の方は、日本語しか話すことを許されなくて、名前も日本語に変えられていたそうです。終戦時に、金村さん（日本語名）という朝鮮人の方が祖母一家のことを心配して夜中に訪ねて来てくれました。金村さんは「日本に帰るための費用はありますか」と聞いてくださり、無いと答えると、必要なお金を用意してくれたそうです。祖母は終戦まで韓国で過ごし、日本人が他のアジアの国々を攻めて支配する様子を自分の目で見て、日本人はアジアの人々へ心からの反省と謝罪をすべきだと感じているそうです。また国と国とが戦力でなく話し合いで友好を進めることを心から願っていると言っていました。

HR 210 **S.W.さん**（目黒で空襲に遭った友人の祖母の友人に取材）「戦争中、生きるか死ぬかは運、だという。毎日毎日”死”という恐怖の中で生きていく苦しさは戦争を体験した人でなくては分からない。私達は戦争体験者の話を直接聞くことのできる最後の世代である。だから私達がしっかりと後世に語りついでいかなければならない。別れ際、言われた「戦争なんてやるもんじゃないよ。なんもいいことなんてないんだから」という言葉が忘れられない。」

HR 201 **A.Y.さん**（平塚空襲に遭った祖父に取材）一番印象に残っている言葉は「戦争は衣食住みんななくなる。」という言葉だ。この言葉を聞いて、本当に戦争と言うものは生活の基盤を壊してしまうものなんだと改めて実感した。また平和のために、何かしてきたこと、何か残してきたものもありました。

HR 201 **K.Y.さん**（新潟生まれの祖母に取材） 祖母の一番上の兄はフィリピンのレイテ島で戦死しました。「赤紙一枚で連れて行かれて、空っぽの箱で帰ってきた」と祖母は言っていました。祖母は、新聞で戦争の記事が載るたびに、切り抜いて日記に貼っていました。「戦争は何が何でも、どんなことがあっても戦争はだめ。」伝えたいことはある？と聞いたときに祖母が言ったことばです。 インタビューを終えてからも、祖母は何度も何度も戦争のことを話しに来てくれました。

HR207 **T.E.さん**（教会員の方に取材）日本の１番の敵はアメリカとイギリス（鬼畜米英）と教わってきたが、戦後アメリカへ留学し、新聞記者、大学教授になったそうだ。新聞記者になったのは、2 度と戦争をしない国なるために、政府が戦争をしようと暴走した時に記事で抑止することができるのではないかと思ったから。煙がたちのぼる焼け野原が当たり前の光景であること、日本が正しいと学校で教わっていたこと、沖縄戦のことや原子爆弾が落とされた広島や長崎の町がどんなに悲惨なことになっていたかなどの情報が公開されなかったことはおかしい。こんな思いをするのは私たちだけでいいんだから。とおっしゃっていた。

HR208 **A.R.さん**（戦死した曽祖父が戦地から家族へ送った手紙を読むと共に祖母に取材）『新聞其他で世界情勢が解るだらう』と書かれた後１行半ほどが墨によって消されています。これは検閲によるもので、何か日本軍に大きな損害がでたというような戦争に対する意欲がそがれるようなことが書いてあったようです。手紙は 7 ヶ月半の間に約 70 通近く届いていて、そのすべてについて書くことはできませんが、ここに書いた以外の手紙からも、娘や妻を思う父の気持ちがとてもよくわかりました。曽祖父は結局遺体も帰ってきてはおらず、髪の毛だけがお墓にも埋葬されているようです。戦争がなければ幸せに過ごせただろう家族、それも僕の身近な家族のことを知って、漠然としか思っていなかった戦争はいけないということについてとても実感が湧きました。

HR201 **Y.C.さん**（三鷹市の戦争体験を調べた）今でも工事で不発弾が発見されることもあり、戦争遺跡として調布飛行場門柱、掩体壕、高射砲台座が残っている。長崎平和記念像の作者が井の頭公園内のアトリエで長年創作活動を行い、また市立小学校と交流が深かったために、同型のものが作られ、仙川公園に「平和の像」として置かれています。